



高野健人さん
Takehito Takano

1979年 (昭和54年) 東京医科歯科大学大学院医学研究科修了。

1987年 (昭和62年) 東京医科歯科大学医学部講師、助教授、米国デューク大学客員准教授を経て、東京医科歯科大学医学部教授に就任。

1997年 (平成9年) WHO健康都市研究協力センター所長に就任。

現在 東京医科歯科大学大学院教授として主に健康推進医学の研究を行うとともに、WHO健康都市研究協力センターでWHOのプロジェクトを推進している。健康都市を目指す自治体のサポートも行っており、「開発」と「住民の健康」は両立するのか、健康都市はどのように実現できるのか、などといった課題に対し、行政が政策をつくる上での過程について研究、アドバイスしている。



一人ひとりが健康について考えると同時に、まち全体で取り組むことも大切となる。

度で、住民が参加してつくった遊歩道が堀之内に完成しました。労力は我々がやるからということ、老人会とか子ども会の父兄が参加したり、地域の自治会が参加して、2年ぐらいかけて約300メートルの遊歩道をつくったんですけれどもね。まさに市民が自分たちのまちづくりにおいて主役になっているということだろうと思いますね。
高野 それは非常にいいですよ、近所づき合いの仕方からいっても、人間関係からいってもね。お互いほっ

健康でつながる
まちづくりを

千葉 今、市川の人口は46万人で、全国の中でも珍しく人口が増えているんですよ。年間2,000人ぐらいの割合でこの5、6年増えてきているんです。そういう中で、WHOの健康都市プログラムに沿ってまちづくりについて考えてみる必要があるのじゃないか、というのが健康都市宣言をする一つの動機というか、きっかけになりました。平成11年に保健福祉を部局にしました。組織的な形での保健福祉というものを、縦割りじゃなくて一つの局にして、流れをよくしようと。それに「健康」を、ソフト面での横ぐしとして入

れていきたいと。
高野 いいですね。
千葉 そういう二面的な入れ方をする事によって、市のまちづくりというものを考えていきたいという考え方が基本にあるわけです。
高野 それは、もう模範的なWHOの「健康都市」になりそうですね。今おっしゃったような話は中心になるコンセプトです。人間の健康というのは保健とか医療の分野だけでは全部をカバーできないわけですね。道路一つとってみてもやはり健康にも関係があります。子どもの安全とか、それからアクセスも考えてみればそうですね。ウォーキングのためにもやはり歩く環境がないと歩けません。

自分たちのまちを
自分たちで
住みよくするために

高野 健康に関係するものを一個一個やっていったのではなかなか大変なわけですよ。だから、包括的に考えていって、一つの方向性を出していきましようというのが「健康都市」のコンセプトです。
千葉 そうですね。自分たちのまちを自分たちで住みよくつくるということが、まずコンセプトであると思うんです。例えば、「※里親制度」という制

健康都市いちかわを
世界へ発信

とするし。いわゆるローカルガバメントと言いますが、基礎自治体の市の役所だけでできる部分と、それから、やはり多くの人に、この自治体は健康に向かっているんだということを理解してもらって、例えば「健康都市」を目指しているんだという宣言をしていただいて、そして、そこに住む市民のかたがたには、そういう方向で協力いただく、あるいは参加していただく。その市民の参加というのは、非常に大事ではないでしょうか。

高野 健康都市プログラムは、ヨーロッパから発生したものですけれども、世界に随分あるんです。
千葉 今後、市川はWHO西太平洋地域事務所の一員としてどういうふうアジアに情報発信ができるんだろうかと。今までは経済協力だけをしてきたけれども、もうちょっとソフト的な面を含めた協力という意味でのアジアへの協力が、「健康」というキーワードを通じながらできないだろうかという気持ちでいますね。これから地方分権という流れの中で、お互いに思っていることを胸襟を開いて、都市間交流はまずスタートしていくべきじゃないのかなと。それはヨーロッパにおいてもアジアにおいても、非常に私は大事だと思います。そしてこのアジアの中では市川が何をし得るのか。それがやっぱりこれから次世代につなげていくと



観賞植物園を散歩。「楽しく歩ける場所も健康づくりに必要ですよ」と高野さん。

※「里親制度」—まちの美化・清掃を目的に、市民と行政が協働で進めるまちづくり事業の一環。公園や道路など一定区画の公共の場所を「養子」に見立て、市民が「里親」となって区画の手入れを行う。市はこの活動に必要な用具類を提供するなどの支援をしている。